

「外国語の習得について」

ブルース・L・バートン

2001.3.2 放送

今回は、外国語の習得について話したいと思います。人はどのように新しい言葉を覚えていくのか。何をすれば上達が早くなり、ちゃんと使い物になるのでしょうか。

視聴者のほとんどの方は、英語やその他の外国語を勉強した経験があると思います。私は英語が母語で、勉強せずに覚えました。日本語はあくまでも外国語として覚えました。また、日本の大学で働いている関係で、外国語を勉強している日本人学生や、日本語を勉強している外国人留学生もたくさん見てきています。

ではこうした経験から外国語の習得について何が言えるのでしょうか。

まず、当然ですが、学習者のなかに、上達が早い人と、そうでない人がいます。しかしどこが違うかという、残念ながらこれといった秘訣があるわけではなく、いくつもの要因が複雑にからんでいるように思います。なかでも、学習者の年齢、語学才能、性格、動機づけ、努力、学習方法、そして生活環境が大きなウエイトを占めていると思われるが、それぞれの影響について少し説明をいたしましょう。

まずは学習者の年齢ですが、思春期を過ぎているかどうかポイントです。子供のうちは、だれでも第二の言語を比較的簡単に覚える力がありますが、思春期を過ぎてからは、そうした力が急に衰え、どんなに頑張っても発音にアクセントが残ったり、表現が不自然だったりすることが多いのです。ネイティブのようにうまくなりたければ、小学生のうちに始めなければなりません。

次は語学センスがあるかないかですが、これは他の才能と同様、ある程度持って生まれたものだと思います。つまり、最初から語学が得意な人とそうでない人がいるわけですが、ここで一つ強調したいのは、こうした才能は、一般的に言う頭の良さとはあまり関係がない、ということです。勉強のできる人でも、語学センスがあるとは限りませんし、逆に他の勉強ができなくても、語学だけは得意な人もいます。

こうした狭い意味での才能とは別に、学習者の性格も関係しています。考えてみれば当たり前のことですが、言葉は使ってこそうまくなるものですから、失敗を恐れて使おうとしない人はいつまでも覚えません。どちらかというと話し好きであまり細かいことを気にしない人が外国語の学習に向いていると言えます。

次には学習者のモチベーション、つまり動機づけです。一つの例ですが、日本人たちがなぜ英語を勉強するかと言いますと、多くの場合、学校で必須科目だったり受験のために必要だからであって、個人的に覚えたかったり、日常生活のなかで必要だからでは決してありません。ところが外国語の習得に限った話ではありませんが、ちゃんとした動機づけがなければ、うまくいくはずはありません。理由はどうであれ、好きな人、必要としている人は上手になることが多いのです。そうでない人は、結局上手になりません。

覚えたいという気持ちと同じぐらい重要なのは、努力です。日本の書店でたとえば『英語を楽に覚える方法』といった題名の本をよく見かけますが、外国語を苦勞せずに覚えようという考え方は甘いです。本当に覚えなければ、努力しなければなりませんし、それも1年、2年ではなく5年、10年続ける覚悟が必要です。

次は、教材や学習方法の問題がありますが、これについては、個人差が大きくてどのように勉強すればもっとも効果があるのかということは、一律に言えないと思います。ただ一つだけ言えるのは、語学力は、話す、聞く、書く、読む、という四つの技能からなって、お互いに補強する性格があるので、あまり偏った学習方法は避けたほうがいいということです。読み書きは面倒だからとりあえず会話力だけを身に付けようというような考え方は、最終的に上達の妨げとなります。

そして最後になりましたが、生活環境も当然、重要です。学習している言葉が実生活と関わりがなければ、どんな努力を払っても、限度があります。この観点から最も効果的なのは、その言葉が日常的に使われている国に実際に行って^{長年}住むことです。個人的な話で恐縮ですが、私は日本語をアメリカの大学で一所懸命に勉強しましたが、日本に来るまではあまり使い物になりませんでした。日本に住んでみて毎日朝から晩まで日本語ばかりの環境に置かれて初めてそれまで勉強してきた言葉を活かすことができたような気がします。

長くなりましたが、要するに、外国語をマスターするためには、幾つもの条件が必要で、そう簡単なことではありません。本当にうまくなりたければ、固い決意と長年にわたる努力が必要で、場合によって、自分の国を離れて外国で暮らすことも考えなければなりません。

もう一つここで言いたいのは、一口に「外国語をマスターする」と言っても、ここまでできたらいい、という明確な線があるわけではなく、程度の問題だということです。上には上があるというように、どんなにうまくなってもまだ上達する余地はある、ということです。

ここまで言う「外国語の勉強は大変だからやめなさい」と言っているように聞こえるかも知れませんが、決してそういうつもりはありません。外国語の勉強は苦勞することが多いのですが、その分だけ、プラスになることも多いと私は信じていますので、むしろお勧めしたいと思います。

外国語がある程度できる人ならだれでも経験はあると思いますが、その言葉で初めてコミュニケーションが成立したとき、何とも言えない達成感があります。そして、うまくなっていくにつれて、今まで知らなかった世界が目の前に広がっていくような、言ってしまうと今までの自分と別人になっていくような、妙に開放的な気持ちになってきます。

しかし、これは一時的なもので、ある程度上達すると、現実に戻されることが多いとも言えます。私は日本に来て日本語の会話が分かるようになると、日本人が日常的に話している内容はアメリカ人とそれほど変わらないことに気づいてがっかりしたことはあり

ます。日本語を覚えたことによって、今まで話せなかった人たちと確かにコミュニケーションがとれるようになったのですが、お互い伝えるものがなければ何の意味もないということを、ようやく悟ったわけです。つまり、言葉はコミュニケーションの手段にすぎず、問題はむしろ話の中身だということです。

実際、外国語の達者な人のなかには、言葉だけが流ちょうで肝心の中身が伴っていない人もたまには見受けられます。しかしこれはむしろ例外ではないかと、今になって私は思います。外国語を習得するに当たって普通、その国の文化や社会に関する知識や理解が副産物として付いてくるからです。言い換えれば、外国語の達者な人は、多くの場合、異文化の良き理解者でもある、ということになります。

今の世の中はどんどん狭くなってきて、異なる文化や考え方をもつ人たちが出合う場が急激に増えています。こうした状況のなかで、文化の橋渡しとなる人たちの存在がますます貴重になっていくに違いありません。

このように考えると、外国語の勉強は、学習者の自己満足だけではなく、世の中のためにもなる、はなはだ有意義な試みだと言えます。お互いに諦めないで頑張ろうではありませんか。

では。